宗像

毎月一日発行
定価 一年 送料共500円
発行所
宗像大社社務本局
福岡県宗像郡玄海町
電話 神湊26番

宗像大社
海洋神事奉賛会結成さる

連日の寒波もやや緩みはじめた二月十一日、中津宮拝殿には、郡内七浦の漁協組合長、水難救済所長をはじめ、関係者二十数名が居並んだ。

紀元節祭と、海洋神事奉賛会結成の祝詞が宮司によって奏上され、一同揃って玉串拝礼をした時、愈々この会の活動を始める決意を固めたのであった。

実は、昨年頃から宗像大社に於ける海洋神事の重要さに鑑み、宗像七浦の漁民を打って一丸とする奉賛団体結成の気運が起り、漸く今日の結成式を見たのである。

宗像大社では、この春から宮中に玄海の「若布」を献上することになっている。大社の性格からいって、此の事が最も時宜を得たるものとして、久保宮司が発案し、ここに実行の段階に至った訳である。

又、秋の放生会大祭の直前には当宮沖津宮、中津宮の神轝を辺津宮に御迎えする「みあれ祭」が、昨年九月二十三日より七浦の漁業関係者の総奉仕によって盛大に挙行せられた。実に六百年振りの復活であったが、御神徳の然らしむるところ、全国にも未曾有の盛儀となったのであった。今後、これをますます盛大に保存したい、という懸案もある。

尚、昭和四十年は日本海海戦の六十周年記念に当る。当宮の沖津宮に於ける五月二十七日の現地大祭はこの旧海軍記念日に斎行せられており、その昔、沖ノ島周辺に於いて日本海海戦が行われたその日に現地大祭を斎行することは「国家鎮護」の神徳に鑑みて重大な意義がある。この六十周年記念の時の現地大祭には、そのかみの英霊に対する大慰霊祭も計画している折柄、これらのことにも、宗像七浦の協力を要請したいという訳である。

祭典終了後、社務所斎館に於て会議が催された。

先ず久保宮司より本日の会合の挨拶と、趣旨説明があり、次いで奉賛会要綱が審議され、満場一致異議なく決定した。細目は別に規定することとし、とりあえず実行しなければならない「若布採取」について懇談が続けられた。

要綱左の通り。

○宗像大社海洋神事奉賛会
要綱

主旨 宗像大社で行う海洋に関係ある主要神事に協賛して神徳を宣揚し、漁業海運に加護を祈請して、国家の繁栄、郷土の産業振興に貢献する。

組織、宗像七浦の漁業組合を主軸とし、宗像又は宗像に関係ある漁業海運業者を会員とする。尚本会の主旨に賛同して、入会を希望する者を加入せしめる。

事業、宗像大社の神徳を宣揚し、皇室国家の繁栄並に郷土産業の振興に貢献するための事業を行なう。

一、早春、採集の海草（わかめ）を天皇皇后両陛下、及び、皇太子殿下並びに宮中賢所に献上する。
二、放生会大祭の〃みあれ〃祭の祭儀に協賛する。
三、その他恒例臨時の海洋神事に協賛する。

実施方法、具体的には宗像大社と七浦漁業組合とが協議し、又必要に応じては、他の関係者の援助を得て推進する。本事業は主として宗像大社海洋分局に於て担当する。

沖津宮、中津宮護持に関する特殊事項。

海洋の両宮護持を完了する為大社は七浦の水難救済連合会に対し、精神的物質的の支持をする右に付恒例臨時の祈願祭を中津宮に於て斎行すると共に、年額若干の援助費を支給する。

なお、海草献上に関する協議事項として、

一、採集の奉仕者。
二、採集の時期と分量。
三、採集の方法と精製の場所。
四、中津宮の奉告神事。
（採集開始の奉告－奉仕者に辞令交付、精製後の奉告、皇室繁栄の祈願祭）
五、献上の時期と、その方法。
六、献上者同行者の選定。
七、採集神事、上京の経費
（採集経費－七浦の奉仕）
（神事上京費－大社負担）

右につき、具体的に懇談がなされた。

七浦の関係者は一応の全貌を知るや、自分たちの生業が献上という事実を通じて、直接に国家、皇室の繁栄につながるものであることを改めて意識したのである。

貫い奉仕を誠心誠意をこめてやりとげることが、即ち一人一人の生きる道につながるという意義は大きい。

海洋神事奉賛会が、今後益々発展して、特異の存在となることを期待したい。

× ×

宗像大社御用達
神輿 祭具 装束
松島神輿製作所
京都市下京区北小路通新町西入
電話(37)八八六九番
振替口座京都一五八九一番

海上自衛隊全艦船に守護札奉斎

この程当大社の守護札数百体が海上自衛隊全艦船に奉斎されることになった。当社は国家鎮護の大きな立場から創建された由緒をもっており、殊に当社沖津宮の鎮座せられる沖ノ島は日本海開戦の古戦場であり、時の司令長官東郷元帥が皇国の興廃を祈願された深い因縁をもっている。

先頃、奉斎される守護札を神前に供え、暁闇のほのあかりの中で厳そかに御霊移しの祭典を執行し、海上自衛隊佐世保地方総監部を通じて配布せられる様送達されたものである。

論説 盲目の太閤秀吉

山岡荘八描くところの小説徳川家康は、大変な人気を集め経営学の宝典とさえ評する向もあるが、戦国の武将として乱世鎮撫の為政者として、まことに英雄の名に恥じない偉材である。然し吾人が小中学生の頃学校で教えられた日本歴史では家康を老猾な狸爺と評して人気がなかった。反対に秀吉が好ましき英傑と察われて、その貧窮の生立ちと円転活達の出世街道に喚発する機智と天衣無縫の快男児ぶりが人気を集めた。たしかに秀吉にはそれが言える庶民的な面白味があったであろう。

今こゝに盲目の秀吉を論ずる。

生涯を賭けて果し得ない庶民的な願望の夢を乱世に代現してくれた彼を渇仰する人士や、資料にのみ極めて忠実な文献学者等は、腕を拱いて躍起の反撃を考えるかも知れないが、静に晩年の秀吉に同情の眼を向けて欲しい。

微賤から身を起して群雄割拠まさに乱麻の天下を平定して、驚異の前人未踏の偉業を成就した秀吉は万人に卓越したけい眼の持主であった。波瀾の生涯を閉じるまで盲目になったことも記録はない。矢矧橋の筵に眠る日吉丸、信長に天下統一の夢を托して草履を取った藤吉郎、困苦の中に歴史の動きを学び民心の帰趨を恫察した才略は非凡な人生史でもあった。彼はそこに何人も及ばぬ心眼否神眼ともいうべき偉大な目を開いていた乱世の刀槍に生きた群雄を、天下平定後海外の征討に送ってその餘力を鶏林八道に指向したことも、政略卓抜の妙手であったかも知れない。そこまでは家康の所謂経営哲学より点数は高かろう。

失敗は晩年にあった。不敗の英傑も名護屋の外征指揮の本営から大阪に引揚げる頃、心眼を亡って盲目秀吉になった。病床に末期の老体を横たえた時は、日吉丸の気魄もなく藤吉郎の才略も失って一個の悲劇の老翁に過ぎなかったのである。

彼を盲目にしたのは豊臣一族の後事、特に愛児秀頼の前途をあやぶむ憂悶である。彼を心眼喪失に至らしめたものは、異国の荒野に惨烈の戦斗を続ける幾十萬将兵への愛情の忘却である。

さすがの戦国の英雄も心眼を閉ぢての盲者の焦慮は哀れであった。五大老五奉行を集めて幾たび起請文を書かせても、天下の権は大阪に残らぬ形勢は見えなかった。往年戦陣の間に悠々と茶の湯を楽しんだ稀代の英傑も、老衰の病床に婦女子の涙に捕えられて「天下の政治、信長公より伝承の事業、家康君次は貴公の番だ、よろしく頼む」の遺言は持たなかった。関ケ原合戦も大阪両度の合戦も盲目秀吉の遺した悲劇である。一族郎党が強豪の圧力の下に塗炭の苦悩を生き抜いた三河武士の修練と団結に、栄華の園に人間の苦悩を知らぬ坊ちゃん秀頼が、おぢの七光りを看板にしても勝負になる筈はない。

愛情は尊いが溺れてはならぬ。盲目秀吉は身を以って最後の教訓をも残したのかも知れない。現代でも医者は自己の肉親は診察も治療もしない。愛情が正確な医術の判断を誤らせる虞れがあるからであろう。吾人は私的な愛情に溺れて営々築き上げた業績を水泡に帰したばかりでなく、種々の禍根を残した事例をいくつも見聞している。最近も或る職場の主宰者が老境に入って、その無能不適の愛児に跡目を譲りたい念願から意見を求めたことがある。後継者は功労あり衆望のある女房役氏が適当だろうと答えたところ、不機嫌な挨拶で終った。愛する子弟への憐情はわかる。事業継承に不適格な者を相続させて多数の反感と混乱とを惹起し、時に破滅の悲劇を招来する迷蒙には賛しがたい。

大成した事業家は高度の倫理性宗教性に磨かれた教育者指導者でなければならぬ。単に権力や財力をのみ拠りどころとして、多数の人材を指揮する頭があれば、知らぬ間に私情の虜となって大勢を恫察するけい眼を亡って両眼兼備の悲しき盲目に終る。それが却って愛児秀頼に悲劇の遺産をかたみわけを贈ることになる。「家康君あとは君がやれ」とは優れた主宰者指導者の最後の命令でなければならない。事業の繁栄のために、多数の幸福のために。

名簿代募金の御礼

客年、宗像会名簿を改訂し会員の皆様に御願い致しました処、一昨年に倍する寄金を頂き、編輯部一同深く感謝いたしております。

早速この寄金で、名簿代の支払いを済ませ、余分の資金で宛名カードを購入いたしました。

又、残余の資金は記念品購入費に宛てたいと存じています。

この記念品は当誌に御執筆下された方、或は原稿等をお寄せいただいた方々にお贈り致します。折角の皆様の御志を有意義に活用させていただき「宗像誌」の紙面充実を計りたいと思っております。全国読者の皆様に厚く御礼申し上げます。

二月吉日 編輯部

阿蒙少言

えらくなると急に親戚がふえる落ちぶれるとその数が減る。親戚の頭数に増減はなくても利害打算にかけひきがある。人は落ち目になりたくないもの○親和の殿堂に風浪動かず。動いているのは獅子心中の虫。ご用心○天に声あるも耳なければ聞えず。声なく蕾のふくらむ時熟考の機を逸しては花開いて後に痛恨の定石に低迷しても打つ手はない。人生すべて平穏無事のとき凋落の赤信号を覚悟しておかねばなるまい○侮辱は自ら自己に与えた場合が最も真剣だ。優れた頭脳の修練はそこに始まる。青年は旅する時代である。先づ文字の宣言より内省と黙行とを貴しとする。○釈迦求道の旅路で、弟子の一人が路傍に黄金を見つけた。それは毒蛇だ。拾う勿れと戒めた。黄白はまさに人生の妙薬ともなり、毒汁ともなる。拾うべし拾うべからず。釈迦に説法が無駄であれば、現代の青年が物質慾に捕われているとは言うまい。○到来ものの羊羹の箱を見つけた児等は動かない。庭の作業を終ってからと母親は言うけれど、手伝いに身が入らない。この畑にやがて美しい花が咲くからと言っても動かない。やむなく羊羹を食べさせたら、宿題がある、試験があると、皆逃げた。花よりだんごはけだし妙言である。○いたづらが過ぎて醤油の瓶を蹴飛ばした。何喰わぬ顔で、キャッチボールに夢中と見えた。母親が呼んだ途端「醤油か！」と口走った。良心は智慧に先行する。○ご無沙汰していますと同席の友人が現われた大先輩に挨拶する。「君などはご無沙汰している方がよいのだ」と痛烈な皮肉。先輩などと威張りたがる奴には一生涯ご無沙汰すべきだ。○眠平なるもの心安し。折々仕事を忘却して天女の側にひるねすることだ。

（白雲）

第二十三回 宗像大社献詠歌会詠草

一月六日於社務所詠草到着順

津屋崎 麦野 時雄
ふくらめる梅の蕾に淡雪の雫のたりて花ときらめく

京都 鈴木日出年
新玉の年ほぐ娘等の舌たらず聟めく吉詞今日もききたり

東郷 小野角次郎
新玉の年立返る晨には朝日照たり玄海の灘

福岡 高橋 昇
天神町行き交ふ人のそれぐに何を求めて斯くはせはしき

福岡 江崎 琴子
うめねずみ好みし色をそゞろにもほだしに粧ふ六十路すぎぬも

田島 力丸 登
あらたまの年の始めや宗像の神の御前にぬかづき祈る

戸畑 田中 初勢
若き娘の礼儀知らぬをなげきつゝ人手不足に小言も云へず

名残 竹原 円
還暦に一人詣ればふるさとの鎮守の森に雪は降りつゝ

香椎 織田 像雨
粉雪降る日をいそぐと年祝ぎのはつもうでする人のさわなる

神湊 隣船 俊
省みて見にくき容の我が心神のみ前の鏡に照して

田島 滝口主米蔵
長雪に家も庭べも埋もれて石灯籠一つにょきり立てり

東郷 藤崎 辰子
難かしき問ひにたじろぎひそかなる悔いにこたつの熱さのがるゝ

内殿 岩崎 和荘
卯の年やかみなりさんは雪を呼び山白たへに豊作とぞ見ゆ

勝浦浜 永島 文子
珍らしく雪かき分けて旧正の野菜採るなり凍てし畑中

吉田 占部 由久
子が手すさびのビニールハウスにこの冬はゴムの木も仙人掌も青々と茂る

手光 中村 吾郎
七輪の火をたてゝ子の焼く餅にわれも坐りぬ妻の居らぬ日

村山田 吉田佐市郎
孫達は一人残らず母里に行きて静けき二日正月

江口 辻野 開造
身にしみる寒波や雪になやまされ梅一輪の季ぞまたるゝ

戸畑 山磨 昌子
八ツ手の木に積みし雪は雪女を連想させて庭隅に立つ

内浦 長畑 房江
長病めば慣るゝを怖れ堪へて来し湯タンポ遂に今年は入れぬ

東京 永島 潤
七沢の山ふところは冬枯れて若竹のみが色映えて見ゆ

米国（津丸出身）浦野かほる
山越して通学したる田島校「宗像紙」前に浮ぶ若き日

勝浦 永島意之助
勇ましく耳ふり立てゝ走り行く兎を歳の象徴にして

勝浦 永島 計七
特急の洗面所忙し待つ人の姿等しくゆれ動きつゝ

吉武 原田 リノ
四年前この岩の湯に浸りつゝ見し日も山に雪降りにけり

武丸 立石 昇
バス席に冬の日薄く射して居り漆黒の髪我が前に揺るゝ

武丸 立石ろせの
十六年我が家を守りし犬老いて見えなくなりぬ霜白き朝

宮田 片山 朔子
大雪をカラーに撮ると子が呼べば昏るゝ日の中眩しみて佇つ

宮田 片山 一
山峡の沼に蓮の葉枯れして茎はむなしく水中に立つ

香椎 桜井 秀
もの一つ購ひてさみしき心なり白々と冬のもや頻つ夕べ

香椎 桜井 ツ子
冬山にだけは登るなよ子に宛てし封書がしかとポストに音す

門司 永島 哲夫
与謝湾に鴨が悠々浮びゐて昨日も今日も牡丹雪降る

戸畑 伊規須ゆき
雪の上に莫座しきて子らの遊びたる跡あらはなり雪消えし庭

福岡 林 まつえ
根雪とはかゝるものよと語りつゝこの幾旬日雪降りやまず

東京 花田千代子
いとし子にすべてを捧げし母なりきそをならはむとす吾も母なり

吉武 金丸 柳蔵
雪に射す陽さし久々浴びながら長閑に暮をうつ園の老人

吉武 高山徳七郎
ブレーキのテストを済ませ凍てつきし坂を静かにバスは降り行く

宮田 北原きみ子
増収の労ねぎらひて着せかける母の瞳の明るき洋布団

東郷 安部 重郎
雪踏みて来し新聞配達の少年の頬あかくもえゐし

東郷 安部 静子
白皚々風吹きすさぶ原っぱに男の児かけて雪投げて居り

原町 中村 幸
負へる子をあやしつゝ行く若き母の声高らかに雪路にひゞく

（四面につゞく）

宗像談話室

禅門の落第生

ここは京都東山の禅堂。一月下旬の寒気肌を刺す暁闇の寒中坐禅。障子は悉く開け放たれて霜のおく音も聞えるかと思われる静寂の中に、会社員軍人学生婦女等さまざ〲の在家の居士数十人が並んで神妙に坐禅の行にあった。肩から下は凍ったように感覚を失い、腰から下も同様でまさに難行苦行である。与えられた「無の考案」は容易に捉えらるべくもない。突如雲水の捧げる警策が肩を打った。無我の境に悟入したつもりでいたところを一撃され、少からず狼狽したこの野狐禅は思わず前にひれ伏す。警策の厳しい数十打、若い野狐禅は庭前の霜の声さえ聞える悟道の妙域にあったという自惚れは一変解消、黙って背を敲かれている。無我の境とはとんでもないこと。雑念の中に四肢の感覚を失って眠ったのである。これでは「無の考案」は解けない。

若い将校が精一杯の理窟を連発して窮餘の一声「進め！」と絶叫して合格し、花も恥じろう妙齢の女性が進退谷まる断崖に追いつめられ尻をまくって「こゝだ！」と裂帛の奇声をあげて允許を得た話を聞いている。寒冷の僧堂に考案を悟得したかの如く誤解して、我おくれじ禅道の合格証書を頂戴しようと、八十餘の老管長が炬燵に蹲り仏書を読んでいる室に入りかけた。一山寂として声なく硬直した手足の音のみ高い。障子を開けると、老僧はこちらを見もしないで静に手を振る。落第だ。やむなく僧堂に帰ってまた坐る。これが何日か続いたが勇ましい号令をかける機会も与えられず、尻をまくって白浪五人男の弁天小僧ならぬ薄汚い青書生の尻を見せる舞台も空しく潰えて、落第生のまゝ召集令状を頂戴した。

腹も頭もないまことにお粗末な軍人が誕生した。然し国家の至上命令に辞職はない。何にも知らぬ末端将校に器材兵員を整える荷物は重すぎる。博多駅で結婚十カ月の女房と別れてからは無我夢中。門司の港を離れて鈍重な輸送副官は所要業務の報告を終えて、やっと我に還った。御用船の粗末な寝床に横たわって一死報国の郷党に対する挨拶を思い出したが、禅堂の坐禅は朝粥と漬物のうまかった味だけが残っている。幹部候補生上りの頼りない将校も出陣の勇士であった。

なるべく敵弾の訪問する方角を避けて、戦死の名誉を辞退しつゞけて、この勇ましくない勇士は祖国に帰って来た。急いで京都に馳せる。「戦場は如何」の問に「命が惜しくて死ねずに帰りました」と咄嗟の答。「よろしい」と叱られるような一言が頭上を走った。これが合格証書だとは思っていない。隻手の声も無の考案も命の惜しい人間には、否人生の実相を知り得ない凡夫には、猫に小判かも知れぬ。

今も生きている。申訳ない。様々の仕事が追いかけて来る中に何の取り柄もなく平常心を装って生きている。

先日或る用件で上京した。ある海難事件の慰霊法要が東都の大寺院で執行され、これに参列した。司行の老僧は天下に名ある九十餘歳の名智識、法要後の法話一時間、盲目の老師が説く人間道禅道仏道は鋭く胸を撃った。達識活眼の偉傑でなければ、この話は出来ないとさえ思った。頭をあげて老師の顔を仰いだ刹那、枯木だ無の考案だと直感した。

その後は駄目だった。金が欲しい命が惜しい生活は前と少しも変らない。用件を片づけるため役人や学者に会う。役人はしかつめらしく嘘を言う。学者はもっともらしくゴマかす。自身またこれに対応してもそろ〲の口舌に懸命だ。附け焼刃の野狐禅が一瞬に闌英の芳香を嗅ごうとは大それたこと。家に帰って庭前の雑木を相手に残る命を過したいと思えども、解脱は出来ない。依然として禅門の落第生である。人生の落陽を声なく歩みつゞける外はあるまい。

（丸桐若闇）

×　×　×

宗像郡宗像会 発起人会開かる！

去る一月二十八日午前十時、宗像町東郷にある町村会館の二階会議室に於て開かれた。

これは昨年あたりから宗像会の再結成のことが話題になり、勝浦に在住する永島計七氏らの奔走によって実現したものである。

参会者は約六十名、

先ず勝浦本村の元老永島意之助翁が立って開会の辞を述べられた。

過去の宗像会は明治二十三年発会し、今次戦争によって中絶する迄続けられた。その間郷土出身の諸先輩が後進を鞭撻育成した成果は見るべきものが多かった。神郡宗像を象徴する宗像大社を中心とする純朴誠実な気風を再び盛り上げる為よろしく御協議願いたい、ということであった。

次に世話人代表として高橋盛平玄海町長の挨拶があり、次いで世話人として永島計七氏の経過報告があった。

実は永島氏が津屋崎町長時代にすでにこの案件が持ち上っていたものであったが、諸種の都合により今回漸く発起人会を開くに至った次第であること。旧冬上京して郷土出身の有力者に意見を求めた処、何れも双手を挙げて賛意を表明し激励してくれたこと、現在迄に各地に散在する地方宗像会は出来れば此の際本会の支部として参加していただきたいこと、さらに、伝統を再推進して有為の人材を育成し、その他種々為うべき世相に対処して行きたい、ということを述べられた。

事務当局が趣意書を読み上げ、これに対する質疑応答が行われた。座長は玄海町の高橋半三氏がつとめた。

質疑の中心点は

①、特に青少年、教育問題を重点として取上げて現代世相を批判せんが為の宗像会であるかの如き趣意書文言は不適当である。

②、一党一派に偏しない立場から事を議するに当って、思想的色彩を強調するかのごとき表現特に趣意書の前文を削除訂正せられたい。

ということであった。質問者は若い人ばかりではなかった。ここにも時代の変転が見られ、今後の宗像会運営の上の将来性について考えさせられるものがあるもののように思われた。

最後に会則の審議に入り、出席者の中から親睦機関である点を忘れて恰も組合会議を論議するかの様な見当違いの質問も出たり、これに世話人側が困惑する場面もあったが、宗像町の山本国雄氏による八幡宗像会の在り方の説明などがあって円満に終了したことは喜ぶべきことであった。

創立総会を二月中に開催したい旨世話人の発言があり、なるべく沢山の会員と会費を獲得するための手配をすることとして散会した。

尚当日は八幡、福岡、飯塚からも各地宗像会員の出席があった。今後順調に発展的伸張することを念願する。

三月祭事表

一日・一五日　月次祭　午前十時

二日　孔大寺神社祭
孔大寺山上に鎮座せられる旧摂社孔大寺神社の春祭。本宮より、職員が献幣する

一九日　松尾神社祭　午前十一時
境内末社―松尾神社
北筑（宗像、粕屋、糸島、福岡）杜氏組合の主催により醸造新酒を捧げて感謝祭が行なわれる。ちなみに、当大社の御祭神市杵嶋比売命は酒造守護の全国総主宰神にまします。

二一日　春分祭　午前十時
―皇霊殿遙拝式―
俗に彼岸の中日にあたる。宮中では春季皇霊祭が行なわれる。一般家庭に於ても、この春分の日を中心にして祖霊を祭り、子孫としてのまごころを捧げる。

二一日　王子神社祭
旧摂社王子神社春祭。唯一の直轄社であるため。許斐山頂のお社まで本宮職員が祭典に参向する。

三月の交通訓

まあまあ、慎重才一でいきましょう

大鳥居移転

この度、国道三号線から東郷東口の所で曲る県道の入口に建っている大鳥居が移転されることになった。この大鳥居は、昭和二年に、旧八幡市芳賀茂元氏が「列国議員同盟会議参列記念」に建立されたものである。

世の盛衰は時代と共に移り変る、しかしこゝ宗像の地は今や時代のブームに乗って益々発展をとげている。

今般福岡県土木事務所より県道拡張の理由を以って現在道路上にある鳥居移転の要請があった。神社側としてもそれに賛同し、早速に移転計画を樹てている。

宮地警察官に感謝状を贈呈

去る二月二十一日、宗像警察署署員定期会合の席上で、玄海町田島駐在の宮地敏雄氏に当社から感謝状が贈られた。

同氏は雨の日も風の日も黙々と当社参拝の車の整理にあたられ、殊に其指導が温かく思いやりのこもったお世話なので、月参りにやって来られる方や、度々参拝に来られる方々の間で評判となり、これが神社に伝わって此度の感謝状贈呈となったのである。

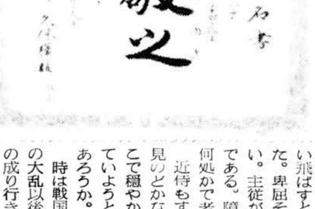
感謝状のほかに、絞りの翁面、一刀彫り延命招福の兎、及び金一封が添えられた。

社務日誌抄

一六日　三苫権祢宜八幡製鉄海の家地鎮祭奉仕の為出向く。住友金属小倉工場五十名参拝。
一八日　職員会議
一九日　小倉東芝工場総務課中尾氏、秩父宮妃に献上の御守を戴きに来社。
二十日　文化財防火デー、午後一時、消化演習実施。
二一日　出光興産熊谷取締役来社。滝口権祢宜、斎藤権祢宜赤間へ出張祭。
二二日　久保宮司、楠本権祢宜八幡宗像会へ出席。
二五日　旧正月祭斎行。八幡市堀江海運（株）、八女市堀川バス六〇名参拝。
二七日　午前十時より宗像マラソン、神社、神湊間。
二九日　当社責任役員片岡道信氏、神山耕三郎氏来社。
三十日　小野権宮司栖陰会に出席。
二月一日　月次祭斎行。出光興産千葉製油所岡見氏、有井建設（株）有井社長来社。
二日　井原金属社長参拝。
三日　節分祭斎行。大分県商工会佐賀羽衣会約百名参拝。
四日　小野権宮司、太田権祢宜県伝習農場地鎮祭奉仕に出張。
七日　深田婦人会境内清掃奉仕旧中山出仕が結婚された。津屋崎中学校長江口氏来社。
一一日　午前十一時建国祭斎行。西日本新聞社宗像支局長三戸氏転任挨拶の為来社。
一二日　宗像町助役、黒木工務店来社。

赤ちゃんの名前つけます
―― 宗像大社 ――
（命名書、お守りを贈呈します）

宗像大社では、赤ちゃんの名付け親を引き受けています。主として氏子の方々の御子さんの場合ですが、御希望によってはどんなに遠隔地の方々にでも御役に立ちたいと思っています。御希望の方はどしどしお申越し下さい。尚幾つかつけたい候補名を御申し出下さっても結構です。組み合せ等によりよりよい名前がつけられます。宗像の大神さまから名前をいただいた赤ちゃんが将来国家有為の人に成長されることを祈るものです


敬之

宗像四郎氏貞

山下半可　作
深田無庵　画

はじめに。

今月号より「宗像四郎氏貞」を連載いたします。彼は戦国時代の末期、若年にして、宗像大宮司家を継ぎ、内外多端の境遇にあって辛苦の末に神領を完うした英傑です。宗像大宮司家の最後に一条の光芒を放った氏貞を、資料を基にして浮彫りしたい。そして宗像大社と神領の姿を出来るだけ明らかにしたいというのが筆者の希いです。

老鶯（一）

天文十二年（一五四三年）の早春であった。ここ周防山口に近い陶ノ庄にある陶隆房の館の奥では、主の隆房と腹心の家臣寺内治部丞とが密議を凝らしていた。

「よいか治部、今の宗像には大宮司が居らぬ。当主の隆尚（正氏）は隠居し、舎弟氏続の子隆像（氏光、または氏男ともいう）は大殿の許に勤番中じゃ。そこで此の際、宗像に大目付として我が党の河津掃部允隆業を遣わそうと思うが、どうじゃ。河津は筑前に於ては豊州勢に対抗して、ようやっとる男じゃ。行く行くは我が家の為に役立とうと思うがどうであろうのう」

「なる程、殿の御威勢をもって宗像の押えとなされば、長州周防の為にも後々の御安泰という訳でござりまするな」

ちら、と目を上げて寺内が隆房を見た。

「こいつめが、わっははは」

隆房が大きな身体を揺すって笑い飛ばすと、寺内もこれに合わせた。卑屈そうな目付が落付かない。主従が手焙りを挟んでの対談である。障子に日射しが明るい。何処かで老鶯の声がした。

近侍もすべて遠ざけてある。一見のどかな小春日和の昼下り。ここで穏やかならぬ謀議が凝らされていようとは、誰が予想し得たであろうか。

時は戦国酣の頃であった。応仁の大乱以後、乱れに乱れ続けた世の成り行きは止まるところを知らぬ水のごとく流れ続けていた。未だ天下人は現われていなかった。強者が弱者を抹消しつつ徒らに〃時〃が推移していた。道義は地を払っていたが、それでも微かに国家統一の態勢が整えられる為の曙光はあった。

民は疲れ、武士すらも時世に倦んでいた。それらの中に在って時勢に目を向ける者も無かったのではない。が、何分にも長い間の乱世に馴れてしまって、ここ中国と、それに隣接する九州に於ては唯野望を逞しくする者達が事毎に衝突している現状であった。そして一方、民を休め、国を休めて世の招来しょうと思う者も、一時の油断もなく、兵を養ない糧秣を貯えることに専心していたのである。

さて、中国と九州には天下を窺う程の器量人はいなかった。中央に余りにも遠いという地理的な条件が割拠牽制主義をとらざるを得なかったのであろう。

中央では、足利十二代将軍義晴が管領細川晴元を頼り、専らその威令回復のことを図ったが、はたされず、京の都は荒廃して盗賊が日夜横行していた。

それでも平和の朋しはあった。やがて近畿、東海を手中に収め、次いで天下に号令せんとした織田信長は時に十才、諸国の勢力は擡頭する盟主を待ち望んでいるかのようであった。水は低きについて流れていたのである。

その混沌たる時世の中に在って黒川郷の館では、黒川鍋寿丸が八才の春を迎えていた。彼の実父は宗像大宮司第七十六代と、七十八代とを続いだ正氏、母は大内家の縁類家臣陶隆房の姪照葉ノ方であった。

戦国の世に政略結婚はつきものであった。肉親縁者でなければ信ずることのできないということは、悲しいことでもあり、又哀れなことでもあった。その親類縁者の間柄でさえも、自己の生存の為には絶たねばならなかったのである。そのような時の流れに呼吸する人々のうごめきの中に在って由緒ある宗像大宮司家でさえも、その例外ではあり得なかった。

宗像家が神領保全のために北方中国の大内家と縁組したのは遠く応永の頃、正氏の曽祖父にあたる氏顕が大内政弘の外孫であったのを初めとして、氏顕の同母兄氏経は大内義弘に従って九州に於て戦い、その子氏俊は大内教弘に従って赤松満祐を撃っている。祖父の氏郷は大内方として小弐と戦い、また陶弘護を援けて南栄道頓を撃った。伯父氏定は大内持盛の外孫で、大内義興の諱の一つを貰っている。それ程の間柄であったので、氏定も宗像歴代の武将として義興に従って出陣し、船岡山の合戦に於て戦功をあらわしている。

右の外、吉野朝の末期から、この天文年間に至る迄、宗像家の当主が正室、或いは側室とした者はことごとく大内家、又は陶家より出ていたのである。自家の運命を大内に托し、大内も亦宗像を頼んで周辺の均衡を保ったのがこの結婚政策であったといえよう。

福岡県農業経営

伝習農場研修館地鎮祭

―宗像町池浦―

二月四日吹雪の中で行なわれた。二四〇坪の研修館用地は真白の雪、神職も参列者も泥んこの中を真剣になって奉仕した。

この地鎮祭の前後に場長の井手直澄氏からいろいろとお話しを伺った。以下井手氏のお話を中心にして同農場の概略等について御紹介したい。

〇昭和十年五月十日、赤間の地に創立、時世を反映して、その名も福岡県農士道場と称した。

〇昭和十八年、福岡県修練農場宗像塾と改称。

〇昭和二十一年、福岡県農事講習所と改称。熱的色彩を多少改めた。

〇同二十四年福岡県農事講習所と改称。

昭和二十八年、女子部を併設。

〇昭和三十六年五月現在地宗像町池浦に新農場建設移転

当初は農村の自力更生を目的として、農林省の勧奨によって創設された。既に本場の歴史、二十六年を数え、修了者は現在農村の中堅人材として福岡県農業の基礎的農業者として活躍している。

今次大戦の前後から幾多の困難が伴い、時潮と共に農村を離れる青年子女の多い時に、県庁農務課の指導と相俟って益々土着農民の必要性を主眼としたその使命は重い。

昭和二十四年、改良農業普及事業の一環を荷い、開拓基地農場をも併設して、農民養成の県営唯一の存在となっている。

さて、敷地は十三町歩、少し狭い。井手氏は二十五町歩程欲しいが、隣接の農家と膝々混えて話し合って生徒の実習をやらせて貰ったらその点は解決出来るし、又一緒に勉強出来る利点があると強調していた。

生徒は約七十名。農民離村者の多い時であるのに志望者が上廻るという嬉しいお話であった。

井手場長曰く、

農民魂を吹込みたい。いかに社会が合理化しても、土を離れることは出来ない。その根幹となるよう教育したい。

全国の田地を改良して完全裏作を実施し、国富を増進させたい。裏作実施こそが酪農経営の鍵である。国、県から、その為の助成金を望みたい。

農場の全生徒の先祖の位牌を預っている　私は全生徒をわが子と同様に思っている故、親代りに朝夕この位牌を拝んでいます。あなた方の子孫を立派に仕立てさせて下さい。と拝むのが私の仕事です。

農場の職員が良い。私の意向もよく汲んでくれて、実に積極的に活動してくれます。この職員の指導する我が伝習農場は、私は農業大学の最先端を行く存在と自負しています。

私は曽て、北満のジャラントンで開拓をし、終戦と共に困苦欠乏に堪えて帰国した時に、宗像大社の拝殿前で一時間坐禅をして自問自答したのを忘れることができません。

命のある限り、お前の愛する国土の為に働きなさい。これが宗像大神様より賜った啓示と思っとります。

研修館が出来上っても、私の施設拡充の夢は続きます。研修館が出来たら天下の農民達の憩いの場として、本当に膝を交えて楽しみ合い、話し合いたいと思っています。（文責編輯部）

（伝習農場全景）

消息

月日の経つのは早いもので、正月も終りに近づきました。今年は世界的な寒さで、郷里方面でもなかなかの事で凌ぎがたい事と推察いたします。当米国でも中東部の方は吹雪が各所を荒し、多大の損害を与えたらしく報じていました。幸に西部太平洋沿岸では例年に比べて非常に寒く困っています折柄、社務所の皆様、新年の多忙な行事でさぞ御疲労なさいました事と思いますが、お正月のお宮詣りの気持は何んとも言えない自己をはなれたすがすがしい心境です。今もなお、心の底に残っています。

宗像郡福間町久末出身の森光妙子様が、宗像紙を読んで下さるようになりました。

津丸の浦野かおる様は邦字新聞ユタ日報の支社をしておられる同胞間に聞えた歌人で、山声歌集の同人であります。先日御願いして、寄贈していただきました。

通信生も兼ねて宗像出身のロスアンゼルス方面の諸有志に親しくお目にかかり度く熱望していましたが、大庭七郎様の肝入りで近い内行にく事になりまして、今から楽しみにして待っています。

（在米）中村次郎平

出光興産

千葉製油所始業式

去る一月三十一日、出光興産千葉製油所始業式が厳そかに執り行なわれた。

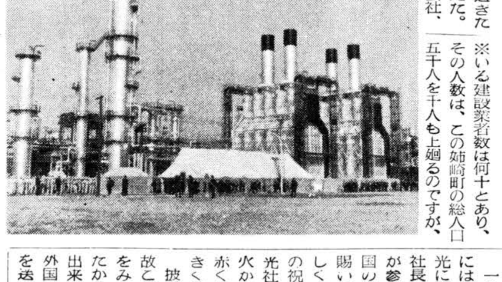
当日、出光社長を始め、関係者列席のもとに、祭典は当社久保宮司、楠本権祢宜及び地元神職の奉仕に依って始められ、出光社長によって無事始業の火が点ぜられ、関係者全員喜びの内に終了した。

以下は始業式に参列した当社職員の手記である。

一月三十日吾々を乗せた車は京葉国道を走っていた。坦々と続く道、磯には海草を採る人、整然と並ぶ海苔ヒビ、ただ内海のありきたりの風物である。それが此の道の終点あたりから様相が一変した。行交うダンプカーの煙土で、前が白く霞む。埋立地が延々と広がり、工場建設予定地の看板が処々に立っている。今東京湾は急速に変貌しつつある。五井を過ぎた頃、白く輝く金属の城が見えた。道路の傍に「出光興産株式会社、千葉製油所入口」の標識がある。車を降り事務所に挨拶に向かう。

先ず事務所に祀ってある「宗像神社」に拝礼をし、川端建設所長のお話を伺う。製油所の面積百万坪昨年六月に地鎮祭を行い突貫に次ぐ突貫工事が僅か八カ月で明日の始業式を迎えるという。「この仕事にたずさわって※

※いる建設業者数は何十とあり、その人数は、この姉崎町の総人口五千人を千人も上廻るのですが、この期間中に一度のトラブルもなく町の人々が抱いていた危惧の念を払う事が出来て幸いでした。」と淡々と語る所長の話の中に人間尊重の出光精神がにじみ出ていた。



一月三十一日　始業式の朝は冬には珍らしい燦々と降りそそぐ陽光に明けた。祭典は午前十時出光社長以下、会社幹部、来賓五〇名が参列して執行された。「皇大御国の大御栄の御為大神等の大神徳賜いて此の工場を永く芽出たく厳しく立栄えしめ給えと……」斎主の祝詞が完り、続いて火入式、出光社長の手により、ボイラーに忌火が点火された。不滅の炎は白く赤く燃え、ここに千葉製油所は大きく鼓動し、操業を開始した。

披露パーティで出光社長は「何故このような短期間で本日の始業をみたのか、それは日本人がやったからです。日本人がやれば必ず出来ます」と挨拶された。居並ぶ外国来賓も心からこの言葉に拍手を送った事が印象的であった。

宗像大社奨学金受給生審議

中学校長会

二月十九日、恒例により社務所斎館に於て開催された。参会者、郡内六中学の校長先生全員。

先ず大社の係職員から各中学校の今年度卒業生のうち一名宛を選定せられたい旨を述べ、四月十五日迄に願書その他を提出していただくよう要請した。これは四月二十九日の祝祭日（天皇誕生日）に受給生を集めて奉告祭をとり行う為である。

次に、今年春を以て第一回の受給生は奨学金受給を終了するので、神社と奨学金終了生との今後の結び付を強化する為の組織を作りたい旨を述べて校長先生方にお願いした。これは終了生が今後進学するなり又は就職するにしても、神社が出来るだけ相談相手になって行きたいという気持から出たことである。

大社の奨学生選定規準は難しい。何よりも人物本位、ということが要件である。成績の上下や家庭の貧富は問題とならない。日本の国土は富士山だけで成り立っているのではない。名も無い平凡な山野が「日本」を構成している。宗像大社の奨学生は「名もない山野」になり得る人物を養成したい、というのが目的である。

こんなことは校長先生方も百も承知。それだけに選定には御苦労される由であった。

小春日和の境内には〃ひよ〃の声がしていた。

役場を訪ねて (4)

＝津屋崎町の巻＝

西鉄津屋崎駅で下車して商店街を西に歩いて行くと、その中心部にデンと趺坐をかいている様に建っているのが津屋崎町役場である。

昭和八年頃建築されたとかで、国会議事堂を憶わせる様な威容を示している。

こゝは昭和三十年三月、旧津屋崎町と勝浦村が合併して、津屋崎町と名乗って八年目になる。

役場職員（含診療所）が町長以下四十九名、教育委員会（含小、中学校勤務）が教育長以下十九名、併せて六十八名の陣容。町村規模としては、決して大きいとは言えない。

昨年二月機構改革によって、従来の総務、税務、土木、経済、社会の五課を、総務、土経、住民の三課と会計室、議会事務局に改めている。

玄関を入って正面が住民課の窓口で、一切の用件がこゝで済まされることになっている。

その左側が会計室で、ふくよかな三苦収入役がデンと腰を下してあるのを見ると、いかにも財政豊かな町ではないかと思われる。（事実はどうか知らないが）

窓口の右側の奥まった処に教育委員会の事務局がある。警察の派出所を改装して昨年の暮移転されたとかで、施設は充分ではないがこじんまりとした世帯である。

教育長は教育界のベテランで、県視学もされた経歴の人。ことに教育にかけては、信念と手腕の持主で又情熱の人でもある。

案内されて町長室に入ると寺嶋町長と森助役が何かの打合せ中だったが快よく応待して下さった。

寺嶋町長は地方行政のベテランである。昭和三年から十七年までの十五年間、役場吏員として勤め、一旦役場を退き、昭和二十三年一月町収入役として就任、翌二十四年に助役になり歴代町長の女房役として十二年間、その功績は全町民に買われ、昭和三十六年一月前町長永島町政の後を受けて町長となり、融和を基幹とした愛町精神の涵養、観光地、住宅地としての条件整備、産業の振興と民生の安定、教育の振興による個人と社会の機的形成の四つのスローガンを掲げ次々とその実績を挙げられている。

役場の裏手に当る所に木造二階建がある。これが青年研修所だとのこと。郡内でこんな施設を持っているのはこゝだけである。町はこの施設を活用して時代に即応する農漁村の青壮年と婦人を対象として研修を始めて今年で四年目、年間二十日間の研修生制度をとっている。研修を終えた青壮年達が農業経営の改善に着々実績を挙げているのも町の産業振興えの一翼として属目されている。

又町の発展は先ず道路からと目下都市計画に基く海岸道路が三カ年計画で三、二八六万円の予算の下に着々進められている。

教育施設も年々強化され、小学校の老朽校舎の改築、中学校の本館建築等が進められ、近く郡内でも優秀な学校施設町村となるであろう。

尚町村合併を前提とする隣接町村との共同事業として、組合立伝染病院、火葬場、し尿処理場、塵芥処理場等の施設と共に高校進学対策として組合立古賀高校の設立等が進められ着々と合併の気運が盛り上っている。

町村往来

◇オリンピック募金映画…宗像町内の各小学校をつぎの日程で巡回する▽5日東郷▽6日河東、赤間▽7日吉武。映画は「赤いネッカチーフ」ニュース、漫画。

◇郡青年団友好祭…3日宗像町河東小学校で開かれた。会場には津屋崎町青年団登山クラブの記録写真や同農業クラブの活動を記録したグラフなどが展示されたほか各町村から集まった男女の団員が軽いダンスに興じたり、用意した贈り物を交換し合うなど、なごやかに親善を深めて幕をとじた。（西日本新聞より）

宗像伝説　その二十五

多礼村のお福さん

玄海町の釣川のほとりに、多礼という里があります。昔ここに評判の働き者夫婦がありました。これが又、余り仲がよすぎて、時々は夫婦喧嘩をしておりました。

普通一般の夫婦喧嘩は意見、感情の相違からお互いに口も利かずに知らん顔を続けるか、又は口論に始まり、つかみ合い、はては茶碗、どんぶり、鍋釜などを投げ打つのが通例ですが、この夫婦の喧嘩は一風変わっていました。つかみ合いなどは決して致しません。口論のあとは二人で手を振り上げ、「こん畜生、こん畜生」と云いながら田や畠へ飛んで行って、無我夢中で麦や菜種の草むしりをするのが常でありました。夫婦喧嘩は田畑にとってはもっけの幸いでした。意地になって草むしりをしていれば、そのうちに気が静まります。くたびれて一夜が明ければすっかり仲が直り、結果としては、田畑が綺麗になっている、という一石二鳥「見本的夫婦喧嘩」でありました。どうでしょうか、こんな喧嘩を心掛けてみては如何ですか。おっとこれは失礼。

さて、夫の小平次は人並はずれた小男でありました。それに反して、妻のお福は人一倍の大女でありました。喧嘩の時に小平次が田畑へ逃げ出したのも無理は無いかもしれませんね。

それはさて措き、小平次とお福夫婦は律義者の子沢山で、十人に余る子福者でありました。夫婦喧嘩は田畑の豊作を齎らし、又子宝を得る原因にもなっていたという、誠に芽出度い結果となって現われたのです。

さて或る冬の夜のことでした。雪が降って、冷え込んで来た夜半に、お福さんはずらりと並んで寝ている子供等を片端から抱きかかえて、外に出て小用をさせました。愈々子供らの終り頃になった時に、

「おいおい、何するか、俺だ、俺だよ」

というのをお福さんは

「何を云うか、子供のくせに生意気な口を利くもんじゃないよ」

無理矢理に抱きかかえて外に出しました。「おや変だよ。」と思って雪明りでよく顔を見れば、何とまあ、夫の小平次ではありませんか。お福さんは吃驚して[illegible]落してしまいました。

「あ、何をするか。」

小平次さんは雪のついたお尻をかかえて家の中へ飛び込んだということです。

そもそも小平次はお福さんに頭が上がらない訳があったのです。お福さんは六尺豊かな大女でしたから、娘時代は誰も貰い手がありません。一方の小平次は四尺そこそこの小男でしたから誰も嫁に来てがありません。小平次は結婚のことを半ばあきらめていました。所がこの小平次に目をつけたのがお福さんだったのです。よくしたもので両極端はうまく結び付いたという訳です。はじめ、小平次は大きなお福さんが恐ろしうして顔もよう見きらん程でしたが、そこがそのなんとやら、或る日或る時お福さんが小平次をひょいとつまみ上げると、多礼の山奥、滝ノ口にさらい込んでそのあとはどげいにかなった、ということが伝えられています。

余談はさておいて、多礼の人は一般に勤勉なので神様の御加護があると信じられており、今でも九十余才迄長寿を保つ人が多いといわれています。（T）

☆………

☆………

宗像大社献詠
俳句作品集（六）

津屋崎　西住喜三郎
汽車めぐり来ぬ早春の山澄めり

津屋崎　久羽　文王
前山の雪に新聞立読みす

津屋崎　毛利　夜潮
部屋の凍て紐スイッチに手を泳がせ

東郷　安部　光洋
寒燈を背に最終のバスを待つ

東郷　小野角次郎
立春や潮のふくれを船走る

津屋崎　溢田史外男
ビニール地にはりつき冬の篠つく雨

東郷　小野かをる
恙なし厨に浸り針供養

津屋崎　占部　河童
凍てきびし患者青菜を歯にからませ

津屋崎　田中　哲二
沖を航く汽笛に麦生育くまれ

津屋崎　香立喜一郎
車の上の雪の厚さよ術終る

津屋崎　勝田　光一
雪降り出す気配巡礼が窓に起ち

津屋崎　安部真佐子
鴬叩く窓にコケシが頷き合う

津屋崎　井浦　良介
海錆びて理髪館に開く梅

玄海　山口　仁道
悩み事多し春雪は消え易く

大島　板矢　邦子
受験子を発たせ波止場で祈り居り

大井　安部　重郎
寒燈下粛々として子に遠し

大井　吉田　杏子
積む雪の下を溪水移り行く

大井　吉田　衿子
吹雪荒れ巨木あがらひきれず昏る

宗像信仰の化身　國学の大家　鈴木重胤大人（五）

筑紫　豊

遠州新居駅の中之郷の諏訪神社の社前に地鎮神社という社がある。地鎮神社というのは、安政元年十一月、東海道沿岸一円に大地震が起ったとき この新居宿附近も大惨禍を被むった。このとき大人は、あたかも第一回の宗像詣の帰途であったが、その有様を見て、同地の豪商で、大人の門人である高須葛根に説いて、私財を擲って、窮民を救助するようにと勧告し、且つ、伊勢両宮、出雲、宗像、香取、鹿島の六大社の神霊を勧請して、一社を興すがよいと勧説した。

大人の勧告を受けた葛根は、大いによろこび、同門人で同地の長老である飯田温徳等とはかり、諏訪神社の境内に、その社を創建したのであった。『筑紫再行』を読むと、四月七日に、高須葦根、葛根の兄弟に迎えられて、九日に講説をなし、人々に乞われるまゝに その社地を見立てやったこと、そして、宗像詣をすましての帰途、十一月二十一日に、神のお供をして、またこの地に立寄り、竣工直前の神社を目前にし、二十三日、大人が捧持してきた、外宮の御鏡、大社の御玉、宗像三社の御守玉を飯田金人に授け、その夜諏訪神社を仮殿として、はじめて地鎮神社に御神霊を移し奉ったことなどが書いてある。

更に 大人の創意によって復興した古社の一例として、大和国城上郡外山村の宗像神社のことを挙げておきたい。大人の記すところによると、大人は嘉永三年六月と同六年二月、江戸から京に上る途中、外山村に鎮座の大神大物主神社に参拝した。この大物主神社は、大和志によれば、世人よんで春日社となすとある社で、大人は、延喜式に名神大としてある外山村の宗像神社が、それであると思い誤って参拝したのであった。ところが、安政元年十月、宗像詣の帰途、さらに、この社に参詣した時、はじめて延喜式の宗像神社は、中古廃絶に帰して、その遺跡すら分らないということを知った大人は、村の故老を尋ね、いろいろと考証の結果、その旧地を探り求め、こゝに古社を復興しようと思い立ち、私財を投じ、村民とともに小祠を立て、みずから土工に加わって、神池を穿ち、「御影の井」と名付けたということである。

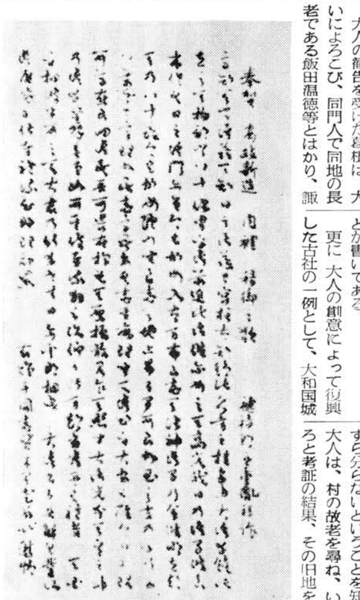
『筑紫再行』の五月十六日の条に、

長谷より桜井に出て山本五兵衛に宿る。宗像神社いたく荒れおとろへおはしましけるをかなしみて、玉井又左衛門・服部伊八に仰せて、作り参らすべきよしかたらひて、金三両をあづけおく。

とあり、また、文久二年から三年へかけての宗像詣である。『筑紫四歴』には、

文久二年七月七日、おのれらは、桜井に行かむとしつるに、外山村にて、竹屋弥平に行きあひたり。今宵は宗像の神事なり、いざとゞまり給へと請うまゝに宿る。村人と共に、御社にまうでて祝詞す。とある。

大人の五十二年の生涯中、殊に天保の末年以後は、ことごとくを神に捧げた観があった。彼の家には、特に一室を浄めて神殿にあて、ここに、あまねく諸大社の神霊を勧請して、朝暮神前に跪拝し、書をひもどいて神徳をたゝへ、門生に向っては神の道を説き、筆を執っては神世の古事を闡明し、孜々として、ほとんど倦むことを知らなかった。（つづく）



皇位継承と祖宗の神器（二）

葦津珍彦

皇位継承法は、憲法の本文において定められるか、それとも憲法と同等の重さを有つ法典において定められるべきであると思う日本国においてのみ、皇位継承法がとくに安易に変更しうるように取り扱われなければならない理由はありえない。いまの憲法が成立した時は、占領下で、とくに東京裁判が進行中であったし、皇位そのものの前途に大きな不安が感ぜられた時代であった。このような特殊の政治情勢を背景として考えるのでなければ、皇位継承法のこのような異常さは理解しがたいように思われる。

第二の異常なる点。日本国憲法においては皇位継承法を修正し、変更するについても、天皇の裁可（同意）を要しないこととなっている。これは殊更にそうしたわけではなくして、憲法が天皇の法律裁可権をみとめなかったがためにそうなったのであろうが、世界いづこの国で、王位継承法の修正変更に、王の裁可を全く無視しているような国はない。

前掲諸王国のほかにイギリスの場合を考えてみたい。イギリスの王位継承法は、形式的には一般の法律と区別されない。独立せる体系的憲法法典を作らなかったイギリスのことであるから、当然である。しかし王位継承法は一七〇一年いらいイギリスのもっとも貴重な根本法の一つとして重んぜられている。イギリスでは、国王は法的に裁可権を有つけれども、拒否権を行使しないといわれている。日本においても、天皇は帝国憲法時代を通じて、拒否権を行使しない習慣を作られた。拒否権を行使しない裁可権は無意味である、との説もあるが、決してそうではあるまい。私は、本来は天皇の法律裁可権の国民心理的意義を重視するものであるが、仮に一般法律の裁可を別にしても、皇位継承法の変更が、天皇の裁可なしに行なわれることは穏当でない。あまりにも天皇をないがしろにするものではあるまいか。これは憲法第八条などと同じく、天皇に対する極端な、不信感を前提として考えなければ、到底理解しがたい異常なものと思われる。皇位継承法の修正変更には、当然に天皇の同意を必要とすべきものであろう。

神器相承の制度

明治の皇室典範では、その第十条に「天皇崩スルトキハ皇嗣即チ践祚シ祖宗ノ神器ヲ承ク」との定めがあった。これは、皇位継承についての古来の不文法を成文化したものであるが、この条文の内容は、憲法改正のときにも、なんらかの形で、新しい法にひきつがれることの必要が痛感された。それは結局、皇室経済法第七条に「皇位とともに伝わるべき由緒ある物は、皇位とともに皇嗣がこれを受ける」という条文となって現われた。

祖宗の神器を承けられることの意義は、象徴としての天皇にとって重大である。けだし世襲（万世一系）の象徴が存在せらるることの意義は、日本国の精神、日本国の意思が、中断せらるることとらるべきものではなくして、国の意思が関与しなければならないものとされる。然りとすれば、その所有権は、当然に公的性格をもつものと思われる。しかし相続税法第十二条等との関連よりこれを見れば、それは明らかに「皇室の私産」と解すべきものである。これは、占領下の特殊の条件下において立法されたために、ことさらにあいまいにした点もあるのではないかとすら想像される。

かくのごとき繁雑にして理解しがたい区分は、どうしてできたのであろうか。それは、憲法第二十条、同第八十八条、同八十九条、皇室経済法、神道指令等の諸規定にしたがって、間に合わせ的に辻つまを合わせようとしたものであるが、いかにも理義不通の点が多い。

（以下次号）

宗像人と剣道

有高　巖

宗像の土地における剣道の古い起源は因より不明ですが、「宗像神社史上」に依れば、大宮司宗像氏実か鎌倉時代の初期、源頼朝の御家人衆に入った頃から強化されたようです。後三百余年を経た戦国時代に、北筑の英傑宗像氏貞が出ると、白山、蔦ケ岳等に築城して外敵と戦うこと約三十年、堅く本郡の光栄ある伝統を守り抜いたと云う。当時その旗下に幾多の勇将猛卒が数々の武功を立てた事と思われるが、詳細は知る由もありません。

越智峰吉先生と永島意之助先生

明治になると幾人かの名剣士が輩出したに違いありませんが、管見の限りでは、越智先生がたしかにその中の一人であったと考えられます。私は今の宗像町曲の出身で、明治三十年に前記越智先生のご長男で、私の無二の親友である珍夫君と共に東郷高等小学を卒業したが同級には今も健在の出光万兵衛、入江淵平等の諸氏がいました。或年、私は宗像神社の大祭に参拝して、偶然越智峰吉先生がどなたかと剣道の模範試合をされているのを拝見して、いたく感激しました。試合中の両先生の太刀さばきのすばらしかったこと、礼儀の正しい事など、全く思いがけない立派なものでしたから、私も是非剣道を学びたいと深く心に誓ったものでした。

その後珍夫君に聞きましたところでは、御父君は安政六年（一八五九年）福岡城下に生れ、小野派一刀流の名師範典与四郎先生に長年師事されて、剣道十二条の目録と免許皆伝とを受けられたそうで、その後宗像に来られてからも、郡内屈指の剣道家であられたようです。それ故同先生は、実に昔の宗像剣道を再興された大恩人の一人であったと思われ、直接そのご指導を受けた青年たちも、相当多かったと考えます。

珍夫君と私とは明治三十三年福岡師範に入学しましたが、同君は幼少の頃父君から教えられていた上に、師範学校で吉留桂先生に鍛えられ、寒稽古など一日も欠かさず熱心にやりましたので、常に同輩から一頭地を抜き、校内校外の試合に一度もひけを取ったことがありませんでした。

私も初志の如く師範で剣道を学びましたが、二年三年と進む中、野球と庭球とに興味をもち他の道に走りました。私と同じ曲生れの中村櫛君は、大へん剣道に打ち込んで太刀筋も鋭く、越智君と並んで校内の代表剣士となり、共に剣道部の役員をつとめていました。

私が明治三十七年春福岡師範を出て東京高等師範に入学した時、その二年前に同校を卒業された永島意之助先生は、曽て福岡師範ご在学中から修猷館の大将松石渉氏と並んで県下の剣道界に名声を馳せておられたそうですが、高師に入って木村敎秀先生の教導により一段と技を磨かれ、東京の学生の中では美術学校の前記松石氏の外によい相手がなく、大試合には大抵専門の剣士と組まれたということで、屡々皇宮警察署の大道場に招かれ、二度も天覧試合をなさったという話です。そこで高師ご卒業の時、嘉納治五郎先生は特に校長室に永島さんを招いて「在学中剣道を修めて技能抜群なり云々」の表彰状を渡されたということです。（つづく）

×　×　×

日本の民主々義

戦前の場合（その二）

天野健一

福沢諭吉は中津藩の出身だが若くして西洋に遊び文化を吸収して帰朝したが、一介の町人として満足し敢て官途につかなかった。「西洋事情」「学問のすゝめ」等を出版し大いに人心の思想、学問を啓発した、当時新聞条令、集会条令等取締りが厳しかったので之が発禁を免かれる為の書物には迷彩を施して居た。福沢は自由学園慶応義塾を開設して自ら塾長となり若き学生を指導した。福沢は民主々義の新しき時代の暁鐘をつきならしたのだ、彼にはこう云う逸話もある。義塾の運動会があった時ヤード競走に六人の学生が白線上に並んだ。空砲合図に五人は一勢に右に走り出したがその内の一人の学生は真赤なジャケツを着け然もこの学生は只一人左に走った。福沢は立ち上って之を見守ったがこの異色ある学生を遂に女婿とした之が後継者桃介である。桃介は学校方面にはあまり熱を入れなかったが実業方面に志して其の方で活躍した。

漢学者中村正直は「自由之理」と云う本を著した。之も福沢の二つの書物と同じ様に、民主々義培養の教本であった。我国には無用の書であるかも知れぬが之を訳して置いたなら西洋の政治を研究する人の参考になるであろうからと、体裁よくことわって忌緯にふれぬ様巧に迷彩を施していたがその真意は、言論の自由、結社の自由、思想の自由、信教の自由、学問の自由等凡そ民人の欲する、自然の本性に基いて民人の権利の主張を説いた。此の本は上層部の専制打破になくてはならぬ武器となった。第二巻出版に当っては「凡そ事限界なかるべからずと雖もひとり愛に至っては限界なし」と云ふべーコンの言葉を引用して、排他的な一部特権階級をこき下し人類愛のゆったりとした世界観を持たざる限り国は立たぬであろうと説いている。果して此の書の発刊は緯源の火の如く為に洛陽の紙価を高からしめたと云う。文博帝大教授貴族院議員となったが学生試験は唯彼の差別なく満点を与へた。然らば何の為に試験をするのかと云えば、試験をすることは其れ丈け本人の勉強になる。採点を争ふが如きは問ふ処でないと平然として語った。如何にも自由主義者民主々義者らしき態度がうかがわれた。

（一面より）

沖ノ島　前田裔之助
年迫り漁る夫の夜の舟に豊漁祈る妻の願ひや

田島　斎藤　惇
思ひつゝ夜ふけて帰る雪の道ひとりぐらしの冷たき家よ

田島　三苫　重格
雪の日を初詣する人の群大和心の失はれずして

田島　宇都宮　淳
窓ごしの山々いまだ白けれど今日の陽ざしに梅の香りす

田島　神戸　幸夫
積雪のはげしきさなか意気高く宗像マラソンの若きらが行く

東郷　小野かおる
雪原の月のさやかに晴れわたりしばし佇づむ夜の静けさ

深田　中野　節子
青草の少しのぞける塀際に豆炭殻捨つ雪深き朝

田島　小野　迪夫
子どもらが喜ぶ故に父吾は雪をひくなり里の雪道を

田島　久保　輝雄
細々と煙を立てゝ三十年異端者の妻老いて嘆かず

我楽苦多告知板

◎近頃ジャンケンで所有権を決定する麗しい？習慣が影をひそめた。原因は所有権を獲得するに足る餌がない事にあるらしい。

◎用務を終えての帰路、バスに乗ると顔見知りの美しい女性を発見！あなうれしやと傍に行きかけると、反対側に口うるさい先輩が控えている。泣く泣く千載一遇の好機を逸したと口惜しがるS君の述懐。

◎レジャーを楽しむのが生き甲斐とばかり、社内でも魚釣り、狩猟、音楽と様々な趣味がはびこっている。近頃は囲碁が盛ん、対局に負けた者は切歯扼腕。床についても天井板が碁盤に見え、泣くに泣けず、眠るに眠れぬそうな。翌朝出社時のブスクレ顔は見るに忍びない。レジャーもこうなれば因果な事。

◎世の中で何事を学ぶにしても必ず先生が必要。処が剣道の師の言たるや不可思議。朝令暮改の言をつらつら考えれば、我々弟子が上手くなりすぎたかな？

◎おみやげの鯛焼、丁度こぶし大位のおおきさ。剣道の師のたまわく「これを一口で喰えれば男だ！」。自分で言った手前、お見事一口に頬ばった。翌日、胃痙攣で休んだ。

◎ここまで書いた時、休んだ本人が平然とした顔で言った。「デマを飛ばしては困る」。らく書もらくに書けない。らくに書くとデマだとこずかれる。奇妙に瓢箪から駒が出たり、ウソからマコトが出たりはするのに、マコトから出るデマのデマカセはらくらくとは書けないもの。

◎年々咲いては又散り又開く神門脇の紅梅が時を教えるかの様に今年も咲き染めた。小さな薄赤い花びらが参拝者の心を誘う。